

《インタビューレポート》

テレジンの子どもの絵との出会いが教えてくれたこと
～絵との出会い、日本での展覧会開催から現在まで～

「テレジンの小さな画家たち」という本をご存知でしょうか。この本が発行されたのは、今から17年前。世界では、チェコスロバキアが現在の二国に分離独立して2年が過ぎようとしていました。テレジンは、その内のチェコ共和国の北部にある人口三千人ほどの小さな街です。この小さな街には、第二次世界大戦中、ヒトラー率いるナチ政権による大量虐殺を目的とした収容所がありました。

「テレジンの小さな画家たち」の著者である野村路子さんは、テレジンで偶然立ち寄った博物館で、テレジン収容所で描かれた子どもたちの絵と出会い、収容所での絵画教育の存在を知り、それを伝える展覧会を日本で行いました。

当時、絵に関しては全くの素人だったという野村さん。野村さんが「一緒に日本へ行くね」と語りかけたという、一枚一枚の絵にはテレジンの子どものどんな表情が写っていたのでしょうか？

また、2011年7月に野村さんが行った石巻市立茨浜小学校で行ったワークショップについても併せてお話を伺ってきました。

テレジンの子どもの作品に出会った頃のお話を聞かせて下さい。

初めてテレジンの子どもの絵を見た時は、なんてことない普通の子どもの絵だと思いました。

ブラハの街に、ピンカスというシナゴークがあります。そこは、床から天井まで壁一面に、第二次大戦の間に、ナチス・ドイツのおこなったホロコースト（大量虐殺）で犠牲になった、チェコに住んでいたユダヤ人の名前が書かれています。20年以上もかけて書かれたものですが、今は、そこがユダヤ博物館になっ

て、テレジンの子どもの作品が100点近く展示されているのですが、私が初めて行った時は、もっと

小さな建物の中に20点足らずの絵が置いてあるだけでした。何の説明もなかったのです。

1989年2月、まだ共産主義の時代でしたから、当時のチェコスロバキアでは英語はほとんど通じないし、どこにも英語の表示はありません。だから、ただの子どもの絵の展覧会かなと思って見ていたのですが、あの絵……首吊りの様子を描いた絵の前に立っていたのです。それで、これは何か特別な絵なのだと思います。

いました。

昨日はなんてことはないと思っていた絵が、今日はまったく別のものに見える

私は傍に座っていた管理人風のお婆さんに絵について質問をしました。もちろん言葉は通じません。仕方なしに外に出て、通りを歩く人を一人ずつ捕まえては、「今、そこで子どもの絵を覗いてきたけど、どういった絵なんですか？」と問いかけました。

その結果、ようやく英語が少しわ

かる方に出会えました。その方は私たちが売店のようなどころに連れて行き、そこに置いてあったパンフレットをくれたのです。

私はホテルに戻って、一晩かけて読みました。そして、ブラハの北60キロのところテレジンという収容所があったこと、そこに15000人の子どもがいたこと、親から離され、飢えや寒さに苦しみながら労働をさせられ、病気になるまで衰弱したりすると、アウシュヴィッツへ送られて殺されていたことを知りました。

そんな収容所の生活の中で、子どもたちの笑顔をとり戻そうと、大人たちが命をかけて絵の教室を開いていたこと、フリードル・デッカーという画家がいて、彼女の「絵を描くことが生きる力になる」という信念からの素晴らしい指導があったことも……。

あくる日の朝、もう一度子どもたちの絵を見に向かいました。そうすると、昨日はなんてことないと思っていた絵が、今日はまったく別のものに見えるんです。そして一つ一つの作品から子どもたちの声が聞こえてくるような気がしました。



作者：ルース・ハイノヴァー（女）
写真提供：野村路子さんより

収容所の状況からは想像出来ないような子どもたちの絵

収容所での生活は極限状態の言えるひどい状況でした。そんな状況の中で描かれた絵でしたら、「首吊りの絵」のような作品がもっとあって当然ですよね。でも、展示されている子どもたちの絵は明るく、子どもらしい生き生きとした絵でした。子どもたちの創造する力、生きる力のすごさを感じました。

収容所の中で子どもたちがこのような絵が描けたことは、本当に特別なことだろう。だとしたら、この人（フリードル先生）のことをもっと知りたい。私がもし彼女と同じよう

にこの状況に立たされた時、果たして同じようなことができたのだろうか……色々考えました。でも、きっと出来なかつただろうと考えがついてしまったんですよ。だからでしょうか、じゃあ私に出来る事ってなんだろうと考えたんです。

私はものを書くことが職業だから、ここで見た絵のことを日本に帰ってみんなに知らせよう。このパンフレットで知った事実を誰かに伝えよう。その時の私は、そのようなことを考え始めていました。まさかこの絵を持ちかえてって展覧会をするとはここではまだ思っていなかったんです。

日本でテレジンの子どもたちの絵の作品展をしよう

その後、3日間ここに通いました。そして3日目。この作品を持ちかえてって日本で展覧会をしよう。一緒に日本に行きましようね。私は、作品一枚一枚に語りかけていました。

3日間の内にそこまで思い入れが強くなってしまったんです。でも、その時は本当に日本で展覧会が

出来るとは思っていなかったし、まさか貸してくれないだろうと思っていました。ですから、一年間はこの思いを行動に移すまいと我慢したんです。でも一年過ぎて、どうしても忘れられません。思いはますます強くなっていました。それで当時のチエコスロバキア（現在はチエコ共和国）大使館に行くことを決めました。

その頃の自分を振り返るとおかしなことが多いんです。だってチエコスロバキアにまったく伝手なんてありませんでしたし、チエコ語だってまったく話せないのに、大使館に行つてしまい、チャイムを押す時になつて言葉の心配をしたんですから。

中に通していただき、お会いした外交官の方は日本語が話せる方でした。私は、ブラハで見てきた子どもたちの絵について話しました。しかし、この方は「私は生まれも育ちもブラハですが、私はそんなものは知りません。テレジンという収容所のこともしりません」とおっしゃるんです。私は地図を見せながら一生懸命テレジンについて話しましたが、

知りませんとおっしゃるだけ。共産主義の時代は、ホロコーストのことはあまり公表されていなかったのです。でもとても良い方で、「本国に連絡してみます」とおっしゃって下さいました。

それから2週間後、大使館から「テレックスが入りました」というご連絡があり、再び大使館に伺いました。テレックスには、「ブラハにある展示物に興味を示していただきましたこと、大変ありがとうございます。ついでには、もっと詳しいお話をしたいのでブラハにおいでください」という内容がチエコ語で書かれていました。このテレックスの差出人が、ユダヤ博物館だったんです。

本当に嬉しかったですね。この時の外交官の方とは今でも親しくさせて頂いていただいているんです。ブラハに行つた時は必ずお食事を一緒にする仲なんですよ。

15000人の子どもたちが展覧会を
実現させてくれたのかも知れない

「テレジン収容所の幼い画家たち
—15000人のアンネ・フランク

テレビジョンの子どもの絵との出会いが教えてくれたこと ～絵との出会い、日本での展覧会開催から現在まで～

「がいた」展は、どうして実現できたの？」とよく聞かれますが、私は何か特別な力が後ろで働いていたとは思えないんです。私の力じゃないんです。私、宗教心が全くないんですけど、この時だけは神さまがいたと思ってしまう。友人たちにはあの子どもたち(テレビジョンの子どもたち)が頼んでくれたのよ。15000人もの力だったのだから、と言われるんです。

展覧会は1991年から日本全国各地で開催されました。今も続いています。その間に、野村さんは、数少ない生き残りの方の存在を探し、これまでに6人の方に会い、幼かったころの収容所での生活、絵を描いた時の思い出などを聞いて、「テレビジョンの小さな画家たち」をはじめ何冊もの本を書いてきました。小学校の国語教科書にも載り、学校の授業でもとり上げられています。また展覧会のパネルは、埼玉平和史料館に保管され、各地へ貸し出しが続いています。(今年7月は埼玉県川口市、8月は大阪府吹田市で開催予定)

手をつなごう！ テレビジョン・石巻市
萩浜・北九州

そして、昨年(2011年)の3月11日。東日本大震災では、多くのかけがえのない命が奪われました。震災のニュースは世界各地に報道され、生き残りの方たちもそのニュースをみていました。その中の一人から「今すぐ、会いたい」というメールが来て、ブラハに行きました。「あなたには、ほとんど全部私たちのことを話しました。でも、今回の日本の状況を遠く離れたこの地で知って、あなたにもう一つ話したいことが増えました。

どんなに辛くても、悲しくても、生きていることはすばらしいことなのだ、被災地で親を失ってしまった子どもたち、心を痛めている日本の方にも伝えてほしい」と、生き残った人間の悲しい思いを話してくれました。

日本に帰ってきてから私は被災地の子どもたちと会う準備を進めました。すると、縁あって日本宇宙フォーラムの協力で、宮城県石巻市立萩浜小学校の子どもたちが描いた絵を国際宇宙センター日本の実験棟「きぼ

う」に届けよう！ という壮大な企画が生まれたんです。

ちょうど北九州でテレビジョン展をやっていて、それを見た子どもたちから、メッセージやプレゼントが届きました。

萩浜小学校では、プレゼントのクレヨン、色鉛筆、画用紙で絵を描いたり、歌を歌ったりダンスをしたりしました。

子どもの絵にはいろいろな絵がありました。フリードール先生のように、子どもたちに「生きる力」を与えられるかどうか…みんなで絵を描きました。津波を描いた絵もありました。中にはラーメンを描いている子どももいました。あの日、津波の時、石



思い思いに絵を描いているで萩浜小学校の子どもたち写真提供：野村路子さんより

巻は雪でした。寒くてお腹がすいて、よっぽどラーメンが食べたかったんでしようね。

テレビジョンについての話をするかどうか悩みました。でも、結局伝えきるのはすごく難しいということになり、テレビジョンについては、子どもたちの生きる力について簡単にお話をした程度でした。テレビジョンのことはまた大きくなってから知ってほしい、という程度でお話をさせていたかったです。

この時描いた子どもたちの絵(絵のデータが納められたDVD)が届けられる「きぼう(宇宙ステーション実験棟)」は肉眼で見えるんです。4月末に子どもたちの作品は「きぼう」に届けられます。子どもたちのあの時込められた想いは、いつまでも宇宙から見守られ続けるんですね。

野村路子 … 作家。89年にテレビジョンの子どもたちの絵と出会い、91年(テレビジョン収容所の幼い画家たち)15000人のアンネ・フランクがいた展を主催。主な著書：「アンネへの手紙」「15000人のアンネフランク」「テレビジョンの小さな画家たち」最新刊「フリードール先生とテレビジョンの子どもたち」

<http://www.teresian.jp>